

特集

専門医はもういない？ せまりくる AI 時代

—新型コロナ時代の切り札になるか—

企画者のことば

高野政志*

チェス，将棋，囲碁などの頭脳ゲームの世界では，人工知能 (artificial intelligence ; AI) に人間は勝てないことが多々ある。というよりも，勝てないことが多くなってきている。AI は自己対局だけでどんどん進化しているそうである。わが国では，働きかた改革も急ピッチで進んでおり，これらを解決する手段として，AI が注目されている。今後10～20年で労働人口の約半分の仕事が AI に取って代わられるとの試算もあり，恐怖感も存在している。

医療界においても，画像診断や病理診断技術へ AI が活用されてきている。診断技術は急速に向上しており，AI ワトソンが白血病の診断をいいあて，患者さんの効果的な治療法へつながったことは記憶に新しい。かなりの衝撃が走ったことは確かである。一方，あらゆる分野の多様なデータがビッグデータとして蓄積されている。医療現場でも DPC データに始まり，個々の患者さんの基本データ，治療への反応

性，予後までもデジタルデータ化され，蓄積されている。今後は遺伝子情報までも蓄積，これらを解析し，適切に患者さんの治療へフィードバックしていくために AI による介入が不可避となるであろう。

本企画を提案した時点では思いもつかなかったが，今世界は未曾有のウイルス感染と戦っている。日本でも急遽オンライン診療が開始されたように，対面しない医療が求められる。AI が医療界へ導入されるスピードがさらに高まるに違いない。

本特集号は産婦人科診療を中心に，AI の基本，実際どこまで有用か，現時点での限界などについて，各領域のエキスパートの方々に update な情報を執筆いただいた。この時代を乗り切るために AI がどのように活用できるかも視野に入れつつ，情報を吟味いただければ幸いである。今後の医師像を考え直すときかもしれない。

*Masashi Takano 防衛医科大学校産科婦人科学講座 (教授)